

## 先人に学ぶ 野村 健・福祉の里づくりの理念と実践

(北海道) 社会福祉法人後志報恩会 理事長 山崎 忠顯

### 「皆が支え合って生き生きと生きられる地域社会づくり」

#### はじめに

野村は（当時37才）、14年間務めた札幌市のケースワーカーを辞め、1970年北海道の豪雪地、仁木町銀山の地に知的障害者更生施設「銀山学園」を創設する。学園には明日の生活もおぼつかない、貧農の子や厳しい環境の知的障害者、中には10年も風呂に入れない子もいたが、そういう人たちを特に選び入園させた。140人の障害者と職員の取り組みの中で「施設づくり」から、障害者が人間らしく生活できる「町づくり」を目指した。今こそ主流となった、地域の中の障害者の生活を、40年間も実践している。銀山学園では、障害者と住民との交流行事が地域づくりという活動につながっていて、そのおかげで「人がそこに住む」ということの深い意味を考え、行動している。

次ぎに開設後間もなくのこと、野村の深い人間性と、福祉にかける信念を伝えるエピソードを2つあげる。1つは創設期から銀山学園を陰で支えた野村昌子（故人・札幌市の初代女性ケースワーカー）、2004年4月、夫についての一文である。

#### 1 「幸せって何だ」

以前、学園の当直をさせてもらっていた時、初老を迎えた園生の一人が夜の団らん時、編み物をしながら私に寄り添ってきて、ボソボソとつぶやいた。「園長先生って優しいね・・」と「どうして」と聞いたら「はじめて学園に母さんと来た時（開園時の入園者面接の時らしい）園長先生が母さんに言ったの、『お母さん、今まで大変でございましたね、ご苦労されたことでしょう、もう大丈夫ですよ』と母さんの手を両手で握ってくれたの、そしたら母さんが泣いたの、そして私も泣いちゃつた」と目をうるませる。

—それまでの永い年月、障害を持ったこの子を連れて、親と子はどんなにか苦しみ、悩み、苦労したことか—「だって母さんは私をつれて死のうと思ったことがあったんだもの」と。私は涙がこみ上げ、ただその子の手を「よかったね～」といって固く握っていた。その時私は、わが夫のために、もっともっと頑張らねば、と熱いものがこみあげてきた。私は今もこの時ことを思うと胸が熱くなる。

それぞれの人の、それぞれの幸せ、あなたにとって幸せって何ですか、どんなささいなことからでも、いつも幸せを見い出せる、そんなみずみずしい感性を、例え身体が不自由になっても、私は加齢と共に失ってはいきたくないと思う。

今日も一日、健康で生かさせていただいたことに感謝しながらー。



2つは、犯罪歴があり創設期に入園した、子供のときから青年期まで、人を信ずることができなくなった中度知的障害者との、生涯にわたるかかわりである。

反社会的な問題を頻繁に起こし、児童施設、教護院を経て、銀山学園に入園した犯罪歴のある青年とのかかわりである。恐喝で懲役8ヶ月、執行猶予3年、3年間保護観察、その後わいせつ行為で再逮捕父親が引き取るも、クリーニング店を無断欠勤で解雇、飲んでは暴れ警察に保護されることが度々。入

園後も飲んでは利用者、職員と大暴れ、他市町村に遊びに出かけていっても繰り返し、警察へ引き取りに職員が何度も行く。言葉が粗暴で、目つきが鋭く相手を威圧した。当時、この青年の担当になった、採用されたばかりの若い職員が、青年とかかわるにあたり野村に云われたことを鮮明に覚えている。

「彼と24時間付き合い、彼の24時間を受け入れること」という内容であった。一方で反社会的行為は続いたが、その後、生活拠点が地域に移ることにより、彼の地域活動参加に周囲から、次第に承認されはじめていた。やがて身分も職員助手となり、銀山の市街地に自宅を建てるようになった。家の新築に当たって職員、園生、地域の方々が基礎土台、水道工事、物品集め、などで資金不足を補った。彼は、強く65才の定年までの勤務を望んだが、肺がんが発見される。ところが入院を徹底的に拒否し、職員による在宅介護がつづいて、その後病院で61才の生涯を終えた。銀山学園に来てから39年が立っていた。彼の生き方から、かって反社会的行動を繰り返していた青年が、銀山学園と地域社会に見守られ、やがて受け入れられ、最後は地域社会に包まれて生涯を終えたと云えるのではないだろうか。

## 2 「青年期の悩み、苦しみを通して体得した、他者への思いやり」

野村 健は「人の痛みが分かる感性が、福祉、医療、保健にたずさわる仕事をする私たちに必要なものだと思っています。」と言う。野村 健の夢は、他人の痛みを感じる感性をまず自分自身で磨き、支えあっていきいきと生活することができ、感謝して人生を過ごせる「福祉文化社会」を創造すること。その夢に向かって、青年期から福祉にかかわり大半を知的障害者的生活に、また彼らと一緒に地域づくりに捧げた。

野村は、小学校6年生の時に、吃音で真剣に悩み始める。級長をしていた時、教壇に上がり本を読んでいたが「かじか」の「か」がどうしても言えなくなり、焦れば焦るほど顔が真っ赤に硬直して、口をパクパクさせてクラスメイトから笑われ、恥ずかしさでめまいしそうになったことにはじまる。さらに高校1年になって結核に罹患。親は心配して東京の吃音矯正所にやらせてくれたが、治らないまま悶々とした日々が続く。「悩みを通して光に至る」というロマン・ランの境地に、どうしたら到達できるのかを思いあぐんだが、どうしても実感として理解するまでに至らなかった。矯正所で学んだ丹田呼吸を一日何時間も行い、吐く息、吸う息に精神を集中させるという訓練を繰り返した。何年も続けているうちに、その時間だけは吃音の苦しみを忘れることができ、心は深く安らいでいった。しかし、吃音を気にする自分から抜け出すことができず、劣等意識から絶望感へ、絶望感から虚無感へ、虚無感から自己否定へと自らを追い込んでいった。アドルムを枕許にしのばせながら、飲むか飲まいかを決断する夜を幾日も過ごした。精神的懊惱の終極は「生か死か」の二者択一だった。死ねなかつた自分は生きるより道がなかつた。その時、自分に対して「どんなに苦しくても自らの力で生きること」他者に対しては、「痛みを分かち合って共に歩むこと」を実践していこうと強く心に誓つた。その自らの誓いを徐々に実践できるようになった時は、ようやく自分の悩みから決別することができたのである。思えば10年の歳月が流れたことになる。

また、次のように述べている。

信仰の道に入れなかつた私は、このようにして他者への依存を捨てて、自らが精神的に自立していく努力の中に、心の幸せが成熟していくものであることを、また自分の幸せは、決して自分だけの満足ー利己の中に生まれるものではなく、他者への思いやりの中に生まれることを、ささやかではあるが体得させてもらったのである。

このような生きざまの中で、私に福祉観たるものがあるならば、精神的には吃音と結核で学んだこと、環境的には福祉の学校で学び、福祉事務所で14年間ケースワーカーとして働かせてもらった経験の中に育まれ、今、知能に障害を持った人たちと生き、その命の尊厳と幸せを願うことによって、熟成させつつあるといえる。



## 3 創設期の銀山学園と地域社会の関係

銀山学園は、過疎化の進む銀山市街地から3キロの山あいに建設された施設。戦後開拓農家が入植したが次第に離農が進み、所有する140ヘクタールという広い面積は、わずかな平坦地を除いて、長期

間未管理のままの牧草地の丘陵、雑木林で覆われていた。400名の入園希望があった。初年度70名、翌年に70名が、道内の全域から、様々な理由によって入園する。開設当初の銀山学園は、風が吹くと停電になり、雨が降らないと簡易水道が干し上がった。今ではうそのような、真夏に敷地内を流れる小川のそばにテントを張ってバケツリレーで水をくみ、農家の納屋から五右衛門風呂を借りての風呂場、まるで職員にとって戦場で働くようなありさま。施設建設時の自己負担などの多額の借金ばかりがあった。それでもこの地で精神薄弱者の幸せを実現するための福祉村を目指すという夢を追って、全国から集まつた職員は一枚岩となつた。何もなかつたが、施設には笑い声が絶えなかつた。当初野村と筆者は入所者生活棟で寝起きを共にしていたが、施設への出入りは、もちろん自由である。しかし入園者はそうはいかなかつた。当時の入園者は、非行で他施設では入園を断られたり、無理して離婚させられ本人が入園を拒否しているのに、施設へ捨てるように置かれてしまつた人もいた。また、保護観察中の人々や婦人更生相談所等で困り果てた末、頼まれ入園してもらつた人が多かつた。野村は、施設長になることを依頼され自ら決断した施設建設であるが、当時で1億円の設備投資長期借金の返済は大変なことで、入園者の生活の充実をはかりながら40数名の職員が養豚、畑作、水田事業など昼夜を問わず必死に働いた。返済は仁木町の助成金、地元銀山農協による特段の協力が大きかった。少しでも利益をあげるために、養豚事業を繁殖から生育する一貫体制にし、農協への飼料代を何年後の払いにして貰い、生育豚の売れた分で、借金を返済するという自転車操業も頗る資金のやりくりで、苦しい財政状況をしのいだ。この時のこと、ある噂がながれた。「野村園長は電信柱にも頭を下げていた」というのだ。自ら飛び込んだ施設づくりとはいえ、借金の返済に関しては、本当に苦しんだことであった。

この時のことを野村は、次の文章に残している。

本当に何もない所からの出発である。それだけに職員は苦労の連続だったと思う。よく耐え頑張つてくれたと、今振り返つてみじみと思う。しかし、誰よりも辛かったのは入園者である。私たち職員は、福祉に情熱を燃やし、耐えられる。しかし、入園者はそうはいかない。施設生活がどんなに嫌でも、社会や家庭に戻れない人々は、生涯、施設で生活しなければならないのである。

未熟だった私は、管理的な立場だけの自分の大変さに翻弄され、入園者の本当の苦痛を知るのに3年の月日を要した。

## 4 知的障害入園者による、地域住民宅への訪問

入園者の最大の苦痛、それは「施設に、いたくない」ということだった。

施設生活には選択できる自由は殆どない。また、食事や入浴や寝る場所も拘束されている。そんな状況の中で、当時入園者の無断外出ー外泊が続出したのは、今思うと当然といえる。無断外出ー外泊があるたび、ケースワークの発想で、その原因を個人や施設内環境の問題として対策を考えた。そんな時、試行錯誤を続ける私たちを嘲笑うように集団脱走がおきる。地域宅の自転車を盗み、ドライブインに侵入し、備品を壊し金まで盗む、犯罪である。これ以上、地域のみなさんに迷惑をかけられない、という断崖絶壁に立たされたる思いに追いつめられた。施設の管理を強化する以外に無断外出を亡くす方法はないのだろうか。しかし管理強化は入園者の立場から見ると、非人間的な対応を意味する。こんな輻輳した思いの中で、悩みは極限に達していった。そんな時、ふと思い出したことがある。入園者と起居を共にしていたとき、私たち職員は、施設生活の苦痛から解放されるため、夜たまに外出できた。その時見た銀山市街のまばらな人家の灯に、「あつ人間が住んでいる」と感動したことを、「そうだ！入園者にもこの感動を味わってもらおう」そんな思いが、私の全身を一挙に駆け巡つたのである。年6回の職員宅訪問からはじまり、やがて入園者が地域のご家庭に招かれて、夕食をご馳走になるようになってから、無断外出ー外泊は、嘘のようになくなつていった。貴重で宝物のような体験だった。口コミで、この家庭訪問が地域の住民宅に徐々に広がっていく中で、「どんなに重い知的障害があつても人として同じなんだ」という、地域住民のみなさんが知的障害者を見る目が変わっていった。無断外出をなくする方法は、外出ができる方法を考えればよかつたわけである。要は、誰の立場に立つて考えるか、ということだった。私が、福祉の原点は地域にある、と確信するに至つた「地域」との出会いであった。

このようにして創立当時に夢見たドイツのベーテルのような知的障害者だけの村づくりは、施設に居たくない入園者の苦しみを肌で知った時、その夢は忽然と消え、障害のある人もない人も、共に同じ人間として、地域で渾然一体に当たり前の生活がしていけるような「福祉の里づくりをしたい」という夢に変わつていったのである。

地域住民宅への知的障害者による家庭訪問について、次のような後日談がある。

2007年2月、社会貢献者として、ヘルシー・ソサエティー賞を受賞した際、分野別の受賞者5名

が、翌日東宮御所で皇太子殿下に拝謁する光栄に浴した。その時にそれぞれが、はじめに3分程自分の活動を殿下に、ご説明申し上げ懇談が進められた。その席で殿下は野村に、法人の願いである「皆が支えあって生き生きと生きれる地域社会づくり」の動機になった「無断外出」がどうしてなくなったのかをお尋ねになられ、野村は知的障害者による地域住民宅への訪問、知的障害者も共に参加する福祉の里づくりについて申し上げた。また受賞者のお一人で、殿下のご学友の女医さんから、後日「殿下は、地域住民宅への訪問により無断外出がなくなったこと、知的障害者も地域住民と共に住みよい地域づくりへの地域活動をしていることに対して、大変関心を持たれたようです。」と殿下の関心の高さを伝えてくれました。（野村談）

## 5 「福祉の里づくりのために、地域社会の偏見をどうしたら、乗り越えるか」

福祉の里づくりの目的、それは「知的に障害がある人も、地域の人たちの理解の中で、地域に住み、働ける人は働き、結婚できる人は結婚し、働けない人たちも、まちを自由に散歩したり、家庭訪問や買い物ができる、そんな福祉の里をつくりたい」という夢のような願いである。それは障害者への差別意識との戦いでもあったといえる。施設入所障害者にとって、外出欲求を満たせるのは「施設」ではなく「地域」である。誰もが分かっていることである。しかし現実は、知的障害者を地域社会から疎外しやすい。それはこの課程でぶつかった第1の関門である。福祉の里づくりのためには、このハードルを乗り越えなければならなかった。1970年当時は、現在と違ってノーマライゼーションの思想は普及どころか全く知られていない。障害者の「社会自立」が国際的にも強調されていた時代であった。障害者への偏見を根底から、地域社会で乗り越えるためには、「まず自分自身の意識を変える」ということが、はじめだった。人として生まれてきた以上「どんなに障害が重くても、その前に自分と同じ人間である」という当たり前の意識をもつということである。地域社会の中で、この大きな偏見という課題を乗り越えられなければ目的は達成されない。しかし目的が見えても、福祉の里づくりは、まるで雲をつかむような状況にあった。そこで最初に試みたこと、地域のトップの人たちで構成した「銀山地域を住みよくする会」の創設である。結果としてこの会の長老達は、口を出すが実践しようとはしなかった。批判するだけで何も生まれてこない。したがって1年で休会を余儀なくされた。

## <地域の若者たちと本音の語り合いから生まれた、共に生きる地域づくり>

そこで地域づくりに共感し合えそうな若人10人ほどで、野村家の自宅を開放し、酒を酌み交わしながら半年間、深夜までの話し合いが続いた。今の生活や職場のことなど思い思いで語り合い、そして最後に農村青年たちが共感し合えたことに、それは今的生活に、「生きがいが感じられない」という悲痛な叫びであった。そこで私たちは「生きがいのあるまち」を自らが参加して創ろうという熱い思いに到達していったのである。こうして1976年、誰もが生きがいを感じられる福祉の里づくりの母体「明日の銀山を考え行動する会」が燃えるような思いで誕生していった。地域づくりに最も必要だったもの、それは人間を大切にしようとする「感性」と「実践力」であった。この会のはじめになされた活動内容は、多彩で羅列すると次のようになる。

- ・銀山地域新聞の発行・小中学生に柔道の指導 青年、婦人、一般に弓道の指導 囲碁クラブの発会（入園者参加）、盆踊り、仮装大会、花火大会の創設と充実。

- ・秋祭りの充実（行動の会は手づくりの出店、植木市、ソフトボール大会、こども相撲・札幌市の人形劇「こぐま座」の招致）地区文化祭・家庭教育学級の開催 カルタ大会 児童遊園地づくり テラコッタ（陶芸他）・母と子の読書会 等の活動があげられる。

第1回目の行動の会出店の収益金10万円は、道社協の補助金と併せて、児童遊園地づくりにつぎ込まれた。この遊園地づくりは入園者8人も自主参加した。今、筆者の手元に、その後始まった地域の皆さんと社交ダンス交流会・10周年記念写真、とチャリティダンスパーティーで、知的障害者が地域の沢山の人たちに交わって、楽しそうに踊っている2枚の写真がある。

野村は、「古きを訪ねて新しきを知る」という、ことわざよりは「古きを訪ねて新しきを創る」ということが好きだという。

銀山地域の地域づくりの中核の役割を果たしてきた銀山文化連盟を、銀山コミュニティ推進協議会に名称を変え、コミュニティ部会、文化イベント部会、福祉部会、多目的施設部会に分け、銀山地域にある23の団体、職域、クラブの代表と10町内会の代表を含め、70人で構成されている。このような流れの中で、知的障害のある人たちも各種イベント、生涯学習教室、文化祭など数多くの行事に参加して、地域住民と自然にふれあい、銀山住民として市民権を得ている。野村は組織再編を機会に17年間務めた会長を退く。

このような地域づくりに対して、1992年北海道では1ヶ所、仁木町銀山地域がモデルコミュニティに指定され、年間300万、3年間の補助が決定、また続いて1993年厚生労働省から銀山学園が道内で1ヶ所「ふれあいのまちづくり事業（B型）」に指定され、年間350万、5年間補助がつくことになった。1993年作家小檜山博さん（泉鏡花賞他受賞）の文化講演を口火に、第1回銀山文化オリンピックの幕が切っておとされた。会場になった銀山小学校は、溢れるばかりの人々で賑わった。1968年35才、北海道開基百年記念福祉論文で一席に入選、将来の北海道福祉のあり方に一席を投じた。1986年銀山学園の開拓的な地域福祉実践が認められ、日本社会事業大学から北海道初の木田賞が贈られる。

1994年社団法人北海道知的障害福祉協会会长に推され、同日本協会の理事、後に「愛護福祉賞」を受賞。北海道社協理事、仁木町社協会長、北海道ソーシャルワーカー協会会长、同日本協会理事等を担う。特に、北海道ソーシャルワーカー協会設立の中心として実現にこぎ着ける。その際道内の福祉系7大学、日本協会会員6名が設立発起人会に参加し、305名の新会員が誕生した。1987年7月、盛夏の小樽市において、日本ソーシャルワーカー協会阿部志郎会長をお迎えし「社会福祉の課題」の記念講演、設立総会が盛大に開催された。その熱意は、今日の特定非営利活動法人・北海道ソーシャルワーカー協会へと受け継がれている。なお、北海道では1961年、日本ソーシャルワーカー協会北海道支部が設立された経緯がある。

野村が理事長を務めた、社会福祉法人後志報恩会は、大正7年11月にはじまる社会福祉法人札幌報恩会から独立し、当初銀山学園は、札幌報恩学園の成人施設として、計画された。

（野村 健 2011年4月13日、79才で永眠する）

以上

この文章はJASW会報No.127号に寄稿されたものです。



## 先人に学ぶ 野村 健・福祉の里づくりの理念と実践

(北海道) 社会福祉法人後志報恩会 理事長 山崎 忠顯

### 「皆が支え合って生き生きと生きられる地域社会づくり」

#### はじめに

野村は（当時37才）、14年間務めた札幌市のケースワーカーを辞め、1970年北海道の豪雪地、仁木町銀山の地に知的障害者更生施設「銀山学園」を創設する。学園には明日の生活もおぼつかない、貧農の子や厳しい環境の知的障害者、中には10年も風呂に入れない子もいたが、そういう人たちを特に選び入園させた。140人の障害者と職員の取り組みの中で「施設づくり」から、障害者が人間らしく生活できる「町づくり」を目指した。今こそ主流となった、地域の中の障害者の生活を、40年間も実践している。銀山学園では、障害者と住民との交流行事が地域づくりという活動につながっていて、そのおかげで「人がそこに住む」ということの深い意味を考え、行動している。

次ぎに開設後間もなくのこと、野村の深い人間性と、福祉にかける信念を伝えるエピソードを2つあげる。1つは創設期から銀山学園を陰で支えた野村昌子（故人・札幌市の初代女性ケースワーカー）、2004年4月、夫についての一文である。

#### 1 「幸せって何だ」

以前、学園の当直をさせていただいていた時、初老を迎えた園生の一人が夜の団らん時、編み物をしながら私に寄り添ってきて、ボソボソとつぶやいた。「園長先生って優しいね・・」と「どうして」と聞いたら「はじめて学園に母さんと来た時（開園時の入園者面接の時らしい）園長先生が母さんに言ったの、『お母さん、今まで大変でございましたね、ご苦労されたことでしょう、もう大丈夫ですよ』と母さんの手を両手で握ってくれたの、そしたら母さんが泣いたの、そして私も泣いちゃつた」と目をうるませる。

—それまでの永い年月、障害を持ったこの子を連れて、親と子はどんなにか苦しみ、悩み、苦労したことか—「だって母さんは私をつれて死のうと思ったことがあったんだもの」と。私は涙がこみ上げ、ただその子の手を「よかったです」と固く握っていた。その時私は、わが夫のために、もっともっと頑張らねば、と熱いものがこみあげてきた。私は今もこの時ことを思うと胸が熱くなる。

それぞれの人の、それぞれの幸せ、あなたにとって幸せって何ですか、どんなささいなことからでも、いつも幸せを見い出せる、そんなみずみずしい感性を、例え身体が不自由になっても、私は加齢と共に失ってはいきたくないと思う。

今日も一日、健康で生かさせいただいたことに感謝しながら。



2つは、犯罪歴があり創設期に入園した、子供のときから青年期まで、人を信ずることができなくなった中度知的障害者との、生涯にわたるかかわりである。

反社会的な問題を頻繁に起こし、児童施設、教護院を経て、銀山学園に入園した犯罪歴のある青年とのかかわりである。恐喝で懲役8ヶ月、執行猶予3年、3年間保護観察、その後わいせつ行為で再逮捕父親が引き取るも、クリーニング店を無断欠勤で解雇、飲んでは暴れ警察に保護されることが度々。入